



HECTEFセミナー(第4回)

POCT (Point of care testing) の 実用化と課題

2014年2月21日(金) 18:00～20:30(受付17:45～)
中野サンプラザ8F 研修室1

18:00

開会の挨拶: 櫻林郁之介

司会: 近藤俊之(特定非営利活動法人VHI機構専務理事)

18:05～18:40

1, 教育講演: 臨床検査の持つ医学的意味とPOC化 櫻林郁之介
(休憩)

18:50～19:40

2, 基調講演: 検査室におけるPOCT化の波と今後の展開 ✕ 谷直人

19:40～20:10

3, 報告: 海外におけるPOCTのトレンド 中嶋克行

20:10～20:40

4, 総合討論: 司会 近藤俊之

(敬称略)

主催: 一般社団法人HECTEF

共催: 日本臨床検査自動化学会POC推進委員会

協賛: 株式会社プロップジーン、株式会社ヘルスケアスクエア

開催にあたり

櫻林郁之介 一般社団法人HECTEF理事長

今回は臨床検査の新しい流れとして近年注目を集めるPoint of Care (POC)技術にテーマを絞り、病院側と企業側の両サイドから、そのメリットや活用方法などについて、海外情報も含めたホットな話題を提供します。

司会: 近藤俊之

司会略歴:

1976年 慶應義塾大学医学部卒業。横浜市立病院小児科。
1980年 厚生省入省、保健局医療課、統計情報局衛生統計課
1985年 秋田県出向、福祉保健部次長兼医務薬事課長
1988年 厚生省、保健医療局健康増進栄養課、同精神保健課
1995年 株式会社エスアールエル代表取締役社長
2005年 独立行政法人国立健康・栄養研究所監事
2006年 千葉県病院局長
2009年 全国社会保険協会連合会顧問
2012年 特定非営利活動法人VHJ機構専務理事

HECTEFについて

HECTEF (Health Care Technology Foundation)

臨床検査の総合的精度保証の観点に立って、その方法論の研究、標準物質の開発・頒布、および外国との交流・国内へ学術情報紹介等を行い、その推進を図っている団体です。

現在、臨床検査標準物質の国内外への頒布や、研究技術協力、米国臨床化学会誌Clinical Chemistryの翻訳等を事業として行っています。

1994年 福祉・医療技術振興会として発足
2009年 一般社団法人HECTEFに変更

1. 教育講演

臨床検査の持つ医学的意味とPOC化

櫻林郁之介



略歴:

1968年 日本大学医学部卒業
1968年 日本大学医学部臨床病理学教室助手
1974年 自治医大臨床病理学教室講師
1979年 自治医大臨床病理学助教授
1981年 米国スクリップス研究所留学
1989年 自治医科大学附属大宮医療センター
総合医学第一講座教授 臨床検査部部长
2006年 自治医大さいたま医療センター副センター長
2008年 自治医科大学名誉教授
さいたま記念病院 名誉院長
一般社団法人HECTEF理事長

日本臨床検査医学会 会長(1998~2004) (臨床検査医学専門医) 名誉会員
世界病理・臨床検査医学会連合 (WASPaLM)
Executive Director (Tokyo Office) (1998~2007)
アジア臨床検査医学会議 (ASCPaLM) 第8回学術総会総会長 (2004.11)
会長 (President) (2005~2006)
国際臨床化学連合 (IFCC) Lp(a)標準化委員会 国際委員(1998~1992) 他
アメリカ臨床化学会 (AACC) 脂質・動脈硬化分科会 (LVDD) 理事(2007~)

1987年 日本電気泳動学会学会賞(児玉賞)
2004年 同 国際学術奨励賞
2007年 世界病理・臨床検査医学会連合(WASPaLM)有功賞
2010年 アメリカ臨床化学会(AACC) Cooper 賞
2010年 埼玉県医療功労賞
2011年 日本臨床検査医学会Bergmayer-Kawai賞
2013年 藤田光一郎賞

臨床検査には多くの項目が開発され、臨床医学の現場で使用されている。臨床検査にはそれぞれ意味があり、医療者はそれをうまく活用することで患者さんの病態を知り、治療に役立てている。ここでは、臨床検査とPOCTの持つ役割の概要を述べたい。

2. 基調講演

検査室におけるPOCT化の波と今後の展開

谷直人



略歴:

1989年 北里大学医学部卒業
1995年 北里大学医学部臨床病理学講座助手
1997年 同 講師
2000年 獨協医科大学助教授
2008年 国際医療福祉大学大学院教授
国際医療福祉大学熱海病院検査部部长
一般社団法人HECTEF理事

日本臨床検査医学会理事・評議員
日本臨床検査同学院常務理事
日本臨床検査自動化学会評議員
同POC推進委員会委員長
日本臨床化学会評議員
同東海北陸支部支部長

主な著書:

臨床検査技師のための救急医療マニュアル(医歯薬出版)
POC・OTC検査の広がり(克誠堂出版)
災害医療と臨床検査—診療現場での簡易型迅速検査を中心に(宇宙堂八木書店)

2010年度の世界における臨床検査分野別売上高で最も売上高が大きい分野はPOCTの糖尿病分野(シェア22%)で、次いで病院用のPOCTと生化学検査がシェア12%である。POCTだけで売上高は16兆円を超えシェアも36%に達する。現在、POCT機器により医療現場での即時検査がルチン検査項目であれば中央検査室や検査センターでの大型分析装置と並立する時代をもたらした。また、イムノクロマト法(定性法)による感染症や循環器疾患の迅速スクリーニング検査用POCTも急成長しており、病院や診療所で普及している。今後、迅速性を生かした定量分析が可能になれば爆発的な成長分野になるであろう。生体情報のモニタリングでは血中酸素飽和度や心電図波形までも電話回線を介して患者宅から医療機関へ送信することが可能となり、POCTの恩恵により患者のQOLは格段に向上している。POCTは着々と技術的進化を遂げている。POCTの発達は検査の在り方を変えていくであろう。

3. 報告

海外におけるPOCTのトレンド

中嶋克行



略歴:

1968年 北海道大学農学部卒業
1970年 大阪大学理学研究科大学院修士課程卒業(大阪大学蛋白質研究所)
1975年 大阪大学医学部栄養学科(医学博士)
1971年 群馬県衛生研究所(臨床病理)
1978年(株)大塚製薬大塚アッセイ研究所(所長)
1987年(株)日本抗体研究所取締役開発部長
1995年(株)大塚アメリカ製薬診断薬事業部長
2000年(株)日本抗体研究所執行役員診断薬事業部長
2005年(株)大塚製薬顧問
2005年(有限会社)中嶋アソシエイツ代表取締役
2007年 Boston Heart Lab Corp 取締役研究開発部長
一般社団法人HECTEF理事
Tufts大学医学部客員教授

日本動脈硬化学会
日本臨床化学会
日本微量元素学会
メタロチオネイン研究会
米国臨床化学会(AACC:LVDD)
米国心臓病学会(AHA)

2001年 日本臨床化学会 技術賞
2002年 米国Tufts大学 Outstanding Research Award
2003年 米国臨床化学会 AACC PBRF Award
2009年 国際動脈硬化学界賞
Outstanding Achievement Award
2011年 米国臨床化学会 AACC Zak Award

日本と医療システムがいろいろな点で異なる海外、特に米国でのPOCTの利用事情は、日本の医療の現場での使われかたと同じ感覚で考えるわけにはいかない。そのような意味で、具体的にどのようなPOCT診断薬が、どのような場所にて使われており、どのような結果をもたらしているのか、アメリカにおける具体例を中心に説明する。即時結果が出るという大きなメリットがあり、試薬代そのものはCentral Laboratoryに比べて大きな違いはないが、それ以上にこの検査を実施する上の大きな問題は、いかに精度管理を保つかという、人件費、施設という大きな問題点が注目されている。人件費の高い米国で、この点がいかにクリアされるか、AACCを通じて多くの議論、研修が企画されている。